

2022.4 no.92



一般社団法人 日本建築美術工芸協会



第三回日本建築美術工芸協会賞「鹿児島市みなと大通り公園モニュメント<悠雄>」
(写真撮影：飯田郷介)



(撮影：飯田郷介)

日本建築美術工芸協会賞は、日本建築美術工芸協会目的に合う建築家、美術家、工芸家その他の人々の連携・協力によって優れた芸術的環境（建築・庭園・インテリアその他を含め）を創造した、あるいは優れた芸術的環境に関して多大な業績があった個人またはグループが選ばれます。

第三回日本建築美術工芸協会賞（1993年）

受賞作品 鹿児島市みなと大通り公園モニュメント〈悠雄〉

受賞者 速水史朗

〈選考委員講評〉

審査委員長 内井昭蔵

審査員 曾田雄亮 池田武邦 榮久庵憲司 近江 栄 仙田 満

・受賞作品の対象の一つとなった鹿児島市みなと大通り公園モニュメントはこれまでの速水史朗氏の作品の中でも一段と進境著しいものと認められる。現地審査での印象は、彫刻そのものは期待通りであったが、彫刻とその周辺全体との関係に多少の疑問を残した。大通り公園の設計に問題があるにせよ、彫刻をつくるに当り公園設計者や造園家などと積極的なコミュニケーションが必要ではなかったと思われる。しかし作品からはヒューマンな感じを受けた。黒御影石の大きなブロックを速水氏独特の形態に分割し、それを結合する方法は彼のこれまでの作品にみられるが、石の新しい表現として注目すべきものといえる。又曲面を使った軟かく滑らかなディテールはパブリックアートとしての大切な条件の一つである近づきやすさをつくり出してこの広場的な公園にふさわしい彫刻となっている。彫刻は三つの大小のブロックにより構成されているが、その隙間を子供達がすり抜け遊ぶシーンがみられ市民に愛されている様子が解った。今回速水氏はこの作品の他、4点の応募があり、それらを含んで一連の作品ということで AACCA 賞を贈ることを決定した。



〈悠雄〉のモケットを前にした速水史朗氏

CONTENTS

■第31回日本建築美術工芸協会賞

AACA賞・芦原義信賞(新人賞)選考結果	4
AACA賞・芦原義信賞(新人賞)・美術工芸賞	5
AACA優秀賞・奨励賞	6
AACA奨励賞・美術工芸賞奨励賞・特別賞	7



▶▶ 4

■時代の華一輪

彫刻家 速水史朗の教え	多田善昭	8
-------------	------	---



▶▶ 10

■「AACA賞の今」を訪ねて

鹿児島市みなと大通り公園モニュメント〈悠雄〉	広報委員会	10
------------------------	-------	----

■会員活動レポート

光を求めて	上江洲牧子	12
30年前の夢を改めて…	竹内春香	13
私にとっての2021年	金原京子	14
「今」と言える未来に…	石垣 健	15
「2021CAFネビュラ展」開催報告	野口真理	16
第30回AACA優秀賞を受賞して	納谷 学	17
第30回AACA奨励賞を受賞して	高野洋平・森田祥子	18
第30回AACA美術工芸賞を受賞して	富山晃一	19



▶▶ 24

■連載 通信建築にみるモダニズム再読 (3回連載)

吉田鉄郎の京都中央電話局と新風館	横田昌幸	20
------------------	------	----

■法人会員の設計事務所を訪ねて

株式会社石本建築設計事務所part2	広報委員会	22
--------------------	-------	----



▶▶ 26

■会員交流委員会だより

第15回aaca京都建物視察会に参加して	青木恵美子	24
----------------------	-------	----

■表彰委員会だより

「第30回AACA賞受賞者紹介のつどい」の報告	可児才介	26
-------------------------	------	----

■広報委員会だより

夢の金融機関支店群見学記	三上紀子	27
--------------	------	----



▶▶ 27

■事務局だより

28

AACA 賞・芦原義信賞（新人賞）選考結果

古谷誠章選考委員長 選考報告

昨年に引き続きコロナ禍での審査となりましたが、一次審査は審査員が集まった作品パネルによる選考、現地審査は審査員の人数を絞って実行し、公開による最終審査は応募者と審査員が一堂に会しての審査を終えることができました。なお、海外の審査員や体調などにより直接参加の難しかった審査員、応募者についてはWEBによる審査も並行する、オンライン、オフラインのハイブリッドの選考会とすることで、一人も欠かさず参加をいただくことができました。応募者各位をはじめ、準備に当たられた皆様にご場を借りて改めてお礼を申し上げます。

今年も大変数多くの応募をいただき、また内容も多岐にわたる作品が集まりました。それだけに審査は時に難航しましたが、結果としてはAACA賞審査にふさわしいバラエティに富んだ審査会とすることができ、また力のこもった入賞作品を選出することができたと思います。そうした中で、圧倒的多数の審査員の推薦により今年のAACA賞に選出されたのは、既存の信濃美術館を建て替えた《長野県立美術館》で、隣接する東山魁夷館と共に善光寺に隣接する公園内に、その地形の変化や周囲の環境との緻密な応答により構想された、建築の枠を超えて一帯のランドスケープを統合する素晴らしい作品です。

気鋭の新人に贈られる芦原義信賞には、斬新な三層のツリー状の木架構によって浮遊感と高揚感を生み出した《Agri Chapel》が選出され、まさに工芸品的な美しさを持つものとして、一次投票では長野県立美術館とともに審査員全員の投票を得るなど、極めて高い評価を得ました。この両者に続く優秀賞もいずれも創意と魅力に溢れた《那須塩原市立図書館みるる》《A&A LIAM FUJI》の2作品に決まりました。前者はJR黒磯駅直近に建つ公共図書館で、駅前広場や周辺の街並みに続く開放感に溢れ、誰にでも親しみやすく、いつも多くの人々に使われています。また、特に2階部分の伸びやかな天井の造形は、一体感のある大らかさと無数のルーバーが緻密に割付けられた周到なもので感服させられます。後者は宿泊施設であり、三層の田の字のCLT構造が互いにずれながら積層し、ダイナミックな重層空間を生み出しています。ここに宿泊する体験は、さながら巨大なアート作品の内部に泊まる非日常感を味わえるものです。

これに対し、特別賞2点《有明体操競技場》と《葉山加地邸》は極めて个性的かつ対照的な2作品で、片やオリンピック・パラリンピック施設として仮想的に使用され、今後は転用される予定の競技場であり、他方はフランク・ロイド・ライトの日本における筆頭の弟子である遠藤新設計の旧宅の宿泊施設へのリノベーション作品です。前者が、従来の競技場にはない、思い切った木の利用によるダイナミックで、

かつ繊細な表情を併せ持つ作品で、また競技場のボリュームを軽やかに持ち上げて解放感を持たせた極めて秀逸な建築表現となっていました。一方後者は葉山の自動車の寄りつけない斜面の上であり、その分海の眺望の素晴らしい立地に、かつて邸宅として建てられた造りをそのまま生かして、宿泊可能な空間として現代に蘇らせたものです。遠藤新の空間を将来にわたって体験可能なものとして再生した意義は絶大なものです。

今年の奨励賞としては、以下の5作品が選ばれました。まず《早稲田大学本庄高等学院体育館》は、普通なら大きな開口を取りながらややもすればカーテンが引かれがちな高校体育館に対して、全体をコンクリートの角丸のボックスで造り、そこに適宜丸窓を散在させる手法で体育館とは思われない外観を実現し、かつ内部にはやわらかい灯りを取り入れる意欲的な試みです。《古家増築UPサイクル》は異様に細長い敷地の中で既存の住戸を包み込むような増築を行うという離れ業がユニークです。千葉大学の門前に建つ《ZOZO本社屋》は、オフィスをバックアップする種々の機能を地域に既存の店舗などを活用してまちと一体化する新しいオフィスの試みであり、《三栄建設鉄構事業本部新事務所》はボロノイ図形を立体化した鉄骨架構による空間が目を引き、鉄鋼関連の社員が働きがいを感じる事務所と言えます。残る1点の《地域に潜む文化と出会えるホテル》は那覇市内の大通りに面するビジネスホテルですが、リゾート目的やワーケーションに配慮して客室等に居心地をよくする工夫が溢れており、一味違う滞在を楽しめるものになっています。

最後に美術工芸賞は《能作新社屋・新工場》、錫の鑄造の鑄型をそのまま見せる収納庫が、それ自体が美術工芸品のような美しさを持ち、また同奨励賞に選ばれた《METALISM》は町工場の生み出す製品の魅力や可能性をアピールする大変意欲的な試みでした。

あいにくそれぞれを詳しく述べる紙幅がありませんが、今年もこのようにバラエティに富んだ多くの入賞作品を選出することができ、審査委員長としてとてもうれしく思います。



■ 第31回 日本建築美術工芸協会賞 受賞作品

AACA 賞

「長野県立美術館」

作者：宮崎 浩 株式会社プランツアソシエイツ
所在地：長野県長野市箱清水



写真撮影 北嶋俊治

芦原義信賞（新人賞）

「Agri Chapel」

作者：百枝 優
所在地：長崎県長崎市四杖町



写真撮影 針金写真事務所

AACA 美術工芸賞

「能作 新社屋・新工場」

作者：広谷純弘、石田有作 / アーキヴィジョン広谷スタジオ
所在地：富山県高岡市オフィスパーク



写真撮影 広谷純弘

AACA 優秀賞

「那須塩原市図書館 みるる」

作 者：一級建築士事務所 UAO 株式会社
所在地：栃木県那須塩原市本町

写真撮影 DAICHI ANO



AACA 優秀賞

「A&A LIAM FUJI」

作 者：建築 MOUNT FUJI ARCHITECT STUDIO
アート Liam Gillcik
所在地：岡山県岡山市北区天神町

写真撮影 鈴木研一



AACA 奨励賞

「三栄建設 鉄構事業本部新事務所」

作 者：株式会社 竹中工務店大阪本店
（建築）小幡剛也、瀬山充博、田中盛志
（構造）大野正人、内山元希
（設備）世利公一、小玉直史
所在地：大阪府大阪市大正区南恩加島

写真撮影 母倉知樹



AACA 奨励賞

「ZOZO 本社屋」

作 者：中村拓志 & NAP 建築設計事務所 中村拓志、高井壮一朗、鈴木健史
株式会社 竹中工務店 成山由典、鈴木宏彬、齋藤悠磨
所在地：千葉県千葉市稲毛区緑町

写真撮影 藤井浩司



AACA 奨励賞

「地域に潜む文化と出会えるホテル」

作 者：佐々木達郎
所在地：沖縄県那覇市松山

写真撮影 Nakasa and Partners



AACA 奨励賞

「早稲田大学 本庄高等学院体育館」

作者：飯島敦義 株式会社 日建設計
所在地：埼玉県本庄市栗崎

写真撮影 Harunori Noda (Gankohsha)



AACA 奨励賞

「古家増築 UP サイクル」

作者：野村直毅
所在地：京都府京都市伏見区深草直達橋北

写真撮影 繁田 諭



AACA 美術工芸賞奨励賞

「METALISM」

作者：プラナス株式会社 代表取締役社長 林 正剛
執行役員クリエイティブディレクター 福田和将
所在地：東京都大田区羽田空港 1-1-4 羽田イノベーションセンター

写真撮影 プラナス株式会社



AACA 特別賞

「葉山加地邸」

作者：神谷修平
所在地：神奈川県三浦郡葉山町一色

写真撮影 Takumi Ota



AACA 特別賞

「有明体操競技場」

作者：株式会社 日建設計、清水建設株式会社、斎藤公男（技術指導）
所在地：東京都江東区有明

写真撮影 鈴木研一



彫刻家 速水史朗先生の教え



建築家
多田善昭建築設計事務所 主宰
多田善昭

私を aaca に招き入れてくださったのは、香川県出身の彫刻家 速水史朗先生である。先生に誘われて入会した後、1997 年に「門入の郷 (Mon-nyu no sato) 門入ブリッジ・椿の城・冒険舞台」で第 7 回 aaca 賞特別賞を頂いた。このとき速水先生に加え、芦原義信先生、内井昭蔵先生、近江栄先生から「環境創造に加え、人とまちづくりの秀作」との評価を頂いたことで、建築家には環境・建築・彫刻・照明・サイン・CI 等を更に総合的に創り上げる責務があると心新たに、今なお私の「ものづくりの思考」を支える土台となっている。

私と速水先生との出会いは半世紀近く前に遡る。私が四国を拠点とする建築家として推進してきた、地域のひとつづくり・まちづくりに賛同してくださり、今なお応援してくださっている。先生は 90 歳を過ぎた現在も現役彫刻家として作品を生み出し続け、作品への想いや創造の秘話を、受け手が理解しやすい言葉にのせて穏やかに語ってくださる。速水先生と交流を持った人は皆、その穏やかさの奥にある熱い想いや作品創造への強い力を感じるだろう。もちろん私もその一人である。先生は次の世代に「芸術文化」を引き継ぐため、小中学生に対しても真摯に向き合い、それぞれの目線に合わせて語り続けている。そして子供たちからも常に何かを学び取ろうとする姿勢を我々に見せてくれる。

【速水先生との仕事】

彫刻家速水史朗として私の仕事に直接参加して頂いた唯一の作品は、縫製工場建築の玄関、表舞台の演出である。施

主も先生と親交があったため、速水作品を迎え入れることは早々に決まっていた。しかし、単に作品を「置く」ということを超え、建築と彫刻の共演に挑戦することが出来たのは、他ならぬ速水先生との仕事だったからだと確信している。

当時の縫製業界は、安価大量生産のため工場を海外に求めることが主流であったが、この縫製工場は伝統縫製技術を活かす試みを続けていた。そのため、私の考える建築としての作品テーマは、既存建物（酪農小屋）を壊さず作業空間として活かしながら増築することであった。先生とは企画段階からこのテーマを共有し、アプローチに沿った前庭的空間に、建築テーマに基づいた作品を置きたいとわがままをお願いしたのである。先生は見事に建築と共生する「瓦とあかり」を創り上げた。

先生はデザイン中に「多田さんの建築や空間を壊していないか？」と何度もスケッチを見せてくださった。その心遣いに触れた時、建築家と彫刻家、そして施主との共演の価値と必要性を改めて教えていただいたように思う。

【速水先生への恩返し】

2015 年、地元の県立高校から電話を頂いた。速水史朗作品の配置を含め、正門周辺環境整備を検討しているという。香川県立善通寺第一高校の同窓会館“静修館”（1987 年竣工）の設計者である私に、同校の校舎改築工事で生じたさら地の空間デザインを依頼したいという内容だった。

この電話の約 6 年前（2009）、速水先生が教鞭をとられて



1992.02 竣工 (株) AVA 速水史朗作品との共演

2015.07.23 ~ 2017.03.30 二校の統合~速水史朗作品の新しい居場所

いた県立善通寺西高校が、善通寺第一高校に統合された。この時「統合先へ移動して頂いた私の作品が、仮置きのままなのが気になっている」と相談されていたこともあり、今回の依頼に応えることは、先生への恩返しのお機だと考えた。

二校の統合に伴い、善通寺第一高校にはデザイン科が創設されていたため、生徒自身に考えさせてはどうかと学校側に提案した。デザイン科の授業に私が講師として参加するかたちで、生徒が主体となって取り組み、三つの彫刻作品に相応しい場所と環境を与えることができた。実際の施工（作品の移動）は、配置計画を完成させた生徒たちが卒業した後になったが、この功績は大きく、速水先生も大いに喜んでくださった。

【日本の建造物は彫刻よりも短命】

私が生まれ育った善通寺市には、空海上人誕生地としての歴史文化を“列柱”を駆使して表現した庁舎（1968年竣工）がある。建築当時の市長と建築家佐藤武夫が地域の固有性を重要視し、内外部に明確な地域性を刻み込んだ素晴らしい庁舎だ。しかし人生100年の時代に、耐震性能不足という理由で54年の生涯を終える。不十分な耐震診断とも受け取れる検討基準で解体が決定されたとすれば、本来あってはならないことである。

近く消え去る市庁舎の中庭には、速水史朗作品が置かれていた。2022年1月に新庁舎が完成した後、旧庁舎跡は公園に整備され、その入り口付近に美しい姿で再登場することが決まっているとのこと。建築と彫刻の共演に終止符が打たれることは残念だが、片方でも生き延びてくれることはせめてもの救いであり、善通寺市民としても喜ばしいことである。

我がまちの「自然環境」や「建造物」が消え去ることは、その地域の文化を伝える生き証人が消えていくのと同じである。私はこれまで建造物の短命さに異論を唱え続けてきたが、

長寿命化への道はまだまだ険しい。しかしその流れの中でも奮闘努力している所有者がいることも書き添えておきたい。四国霊場70番の本山寺は、建立100年を超えた五重塔の解体保存修理工事を行った。新築ではなく保存修理を選択したのである。塔の歴史的文化的価値を失わないよう、各分野の専門家と堂宮大工の知恵を結集し、6年の歳月をかけて完遂した。また徳島県つるぎ町は、竣工後50年近く使い続けてきた小学校と本庁舎を、更に40年以上使い続けるため、耐震改修工事を行う英断を下した。いずれも日本建築防災協会から「耐震改修優秀建築賞」を授与されている。地域の「建造物」を大切に、誇りを持って事業に取り組んだ証である。

前述の善通寺市庁舎や、前川國男設計の日本初高層建造物「旧東京海上火災ビル」が解体される事例と考え合わせると、歴史的建造物を次の世代に伝える原動力は、あくまで所有者の考え次第、ということを非常に強く感じる。

ここに原稿を寄せるきっかけともなった飯田郷介さんとの再会は、aacaが持つ日本建築学会や日本建築家協会とは大きく異なる重要な役割を、再認識する良い機会となった。今後はaaca賞が受賞者に与える影響力を語り合う場があっても良いかもしれない。現在の会員構成は40%程が建築家関係者であることから、aaca賞と美術工芸賞を同じ重みとし、各一作品の賞とすることはできないのだろうか。芦原義信賞新人賞は別性格の賞とし、これも一作品とするような選定は出来ないものか、などと考えを巡らせている。

幸いなことに、私をaacaに招き入れてくださった速水先生から今なおご指導を頂ける立場にある。速水先生から教わったことを更に磨き上げながら、次の世代へ引き継げるよう、今後も精進したい所存である。



善通寺市庁舎（1968年竣工）奥には重要文化財 旧善通寺偕行社（1903年竣工/2008年保存修理）がみえる

「AACA 賞の今」を訪ねて

鹿児島市みなと大通り公園モニュメント<悠雄>

速水史朗

広報委員会

「瓦」の原点

「私の仕事は陶芸と違って瓦製造と全く同じ方法で制作する。即ちすべて板造りなのである。だから陶芸以上に土という生き物の生いたちや性格をよく知り、やさしく、慎重に付き合っただけでやるのが大切であるということを知るまでにはずい分と時間がかかった。土をあつかうのは愛情と決断であるということもわかってきた」と語る速水史朗氏は、昨年10月27日に94歳を迎えられた今も毎年誕生月に銀座で50年近く個展を開催されています。

速水氏が生まれ育った多度津は海あり、山ありで、海と山が少年時代の遊び場であったそうで、物心ついた頃から海の匂いと山の香りを満身に浸み込ませて育ち、山から見る町の風景は、かなり変化に富んだもので遊びの間によく写生されたそうです。そして「小さい港町は一万石の城下町でもあって、武家屋敷の跡や豪商の屋敷跡が美しく残っていて、山の上から見る街並みは、向き向きになった屋根の美しさが見事であった。そんな屋根瓦を丹念に写生していたのを思い出す。このことが今、私も『瓦』の仕事につながっているとも言える」と「瓦」との出会いも早かったそうで、「日本の風景を作ったのは瓦である」との思いの原点となっています。

速水氏のお母様は猪熊弦一郎のお父さんの教え子という環境の中で、少年時代はとても絵が好きで、絵を描かない日がない程で、お母様の話などを聞きながら、少年時代は将来、猪熊弦一郎のようになりたいと思っていたそうです。画家を目指した速水氏は、美術学校を受験しようと思いましたが両親に美大生は戦争に行かされると大反対され、横浜専門学校（現・神奈川大学）の機械工学科へ入学しました。しかし、この年終戦を迎え、学校が空襲で被害を受けたこともあり、徳島工業専門学校（現・徳島大学工学部）機械工学科へ転入学されました。大学卒業後は、絵ばかり描いて半年も定職につかない速水氏を心配した母親の勧めで多度津町立多度津中学校の理科教師となります。そこに東京藝術大学を出て美術の先生をされていた彫刻家松村礼一氏に出会い、彼から教を乞うこととなります。さらに東京のアトリエが震災で焼失して郷里に戻っていた松村先生の先生にあたる新田藤太郎という日展の審査員をされている彫刻家が学校のそばに住んでいることが分かり、毎晩のようにお宅へ通い、昔の美術学校の話やら、東京での彫刻家の話を聞き、そこで彫刻を始められ、そして「彫刻家になりたい」と思うようになったそうです。そして松村先生の推

挙もあり、27歳になり普通寺市立東中学で美術教師に就かれ、さらに41歳の時に普通寺第二高等学校へインテリアデザイン科設置により転勤されました。そして60歳になるまで教師を続けられましたが、その間、香川県内の学校、スポーツ施設などに多くの作品が設置され、また文部大臣賞を始め多くの賞を受賞されました。なお現在も高松大学発達学科の学生に週2回図画工作の90分の授業をされており、世界にも稀な94歳で現役の美術教師を続けられています。

「土」との出会い

速水氏は、最初は具象の《首》を作られましたが、それが粘土に触れた始まりだそうです。そして粘土は、鑄造の場合は、一つの過程で過ぎてしまうのですが、「粘土がすごく綺麗だな」と思われ、「そのまま残すにはどうしたらいいか？ そうだ焼こう」として「昔は粘土は彫刻家にとっては彫刻をつくるある過程の途中であり作品ではないという時代でした。でもこんなに立派な素材は作品にしないといけな」と焼き物を始められ、また抽象へと向かわれました。

そして瓦の制作を始められました。瓦の魅力について、速水氏は、「瓦はイブスと黒くなりますが、瓦をイブス時に異物が当たっていると、イブシが入らなくて、その部分が白くなる。職人はアタリと言って、それをきらう。しかし、このアタリの色こそが瓦の中身の色と同じなのである。私は、それを逆手にとって、わざとイブシをかける前に、物を置くことをしばしばやってみた。その結果、この白いアタリの部分は様々な色の変化を見せてくれた。銀化と白いアタリの中に紅にもまさる美しい色を発見することができた」と独特の作品が生まれていますが、速水氏以外に日本国内に瓦による彫刻家はいらっしゃらないようです。



速水史朗スタジオ
(設計：伊丹潤)



イサム・ノグチとの出会い

石の彫刻を手掛けるようになり、石彫できる場所を探していた速水氏は、44歳の時に高松近郊の庵治石で有名な牟礼町の和泉屋石材の和泉正敏氏に出会い、現在に至るまで石彫は牟礼で制作をすることになります。そして46歳の頃、ニューヨークから毎年和泉正敏氏の許を訪れていたイサム・ノグチ氏に出会い、親交を結ぶことになります。

そして、毎年国内外での彫刻展への出品、作品の設置と、超人的な制作が続き、また毎年多くの賞を受賞されました。「私の制作量が多い」と語る速水氏の作品は、「昔の日本の街道には辻々に『道しるべ』や『地藏さま』などが置かれて、旅人や、その土地の人たちの心の寄りどころとなっていた。現代の都市空間や町々にも、通りにも、それに代わるものがあっていいと思う」と語られるように全国津々浦々、北海道洞爺湖畔から沖縄名護市まで全国に200を超えるモニュメントとして設置されています。

お気に入りの作品は鹿児島市みなと大通り公園《悠雄》と東京都庁舎《宇宙からのメッセージ》、それから名古屋の愛知芸術文化センター《阿吽》と香川県立丸亀市競技場《記録の門》、大塚製薬株式会社徳島第二工場内能力開発研究所《水の石庭》を挙げられますが、香川県内だけでも、高松市中央公園、あじ竜王山公園、琴電高松築港駅前、瓦町駅地下広場、県総合運動公園、香川労災病院、県立善通寺第一高等学校、高松大学など枚挙に遑がないほどですが、東京都内にも、OVAL PLAZA（青山）の《オーバルの塔》、府中市郷土の森・府中市博物館《祖》、《蔵》、《塊》などを見ることができます。

速水先生は、「大変良い場所に座って街の風景の中で楽しそうに生きているものもあれば、殆ど無視されそうな不思議な場所へ無理に置かれているものもある。幸いにも私の彫刻は不思議と良い場所に置かれて、街の人々と親しくなっている場合が多い」と語られています。特に野外の作品は、人がいたほうが写真としても面白い場合が多く、やっぱり「触れ合う」というのが野外彫刻の持ち味で、子どもたちが先生の作品と戯れている様子を見ることも楽しみにされているようです。

語りかける彫刻

「美術館に置かれた作品は静かに観る人に語りかけているが、街の雑踏の中での彫刻は大声で人に働きかける。その彫刻たちはよく働き、街のために努力しているかのように

さえ見える。日本では彫刻による街づくりが各地で行われてきた。野外彫刻展の隆盛と同様に私たち彫刻家にとっては大変うれしい出来事ではあるが、方向を間違えると、彫刻公害が生まれかねない。

彫刻には流行などあろうはずがない。その時代、時代の歴史の証であり、必ず、人々の交流が存在しなくてはならないものだとしている。簡単に外国で、今こんなスタイルが多いからといって、よく似たものを日本の街へ導入してほしくない。日本の風土や街や人に合った街づくりのための彫刻でありたい。」

「人の心を動かし、人に語りかける、そして人に愛される彫刻は美しい。働きのない彫刻は街の中で邪魔にこそなれ、環境を美しくする街づくりの役には立たないことを私たちは知らなければならない。彫刻は人が造り、人は彫刻によって豊かにならなければ、物を造る意味がない。自分自身が豊かで、暖かい人間であることを願いながら、土にさわり、石と対面している毎日である」（速水史朗）

（文責：飯田郷介）



《首》



香川県立丸亀市競技場
《記録の門》



「光のかたち」



JR 琴平駅前「こんびらふねふね」

光を求めて



ステンドグラス・工芸作家
日本建築美術工芸協会会員
上江洲牧子

私は学生時代にステンドグラスの光に心惹かれ、現在もガラスを主に制作を続けています。ステンドグラスの技術を教えてくださった平山健雄先生にお声を掛けていただき、展覧会委員会に参加して3年が経とうとしています。昨年はコロナ禍の第4回BOX展に携わり、多くの作家が地球環境を念頭において制作されており、自分は私的で内的な物ばかり追い求めてきた事に気付かされました。

多くの作家が持続可能な創造社会を願う気持ちから素材を厳選し表現活動をされています。改めて私もサステナブル・SDGsについて考え、夏にはこども対象のフュージング講座でガラスのハートを一緒に作り、膨張率の同じガラスであれば板状でなくても粒や粉のガラスでも電気炉で熔解できるので、ゴミとして捨てるガラスは無い事をお伝えしました。※フュージング (fuse/fusion = 熔解 / 融合、様々なガラスを炉で溶かし好みの形に変える)

展覧会委員会で様々な意見を聞かせていただく中で響いた言葉は、これからは女性が活躍する時代であり教育が大切という事でした。実際女性たちが声をあげ、男性教授に偏った美術教育を変革しようとしています。社会への義務や個人の自由、宗教も含めると意見の交換を滞る事なく続けていく事が重要だと考えます。aaca会員の交流の場作り、委員会同士の交流など新たに変化していく事で新規会員も増えていくと期待しています。

その為にはボランティアで負担がかかり過ぎる今の現状を変えようと展覧会委員会では行動を始めています。収入を計る仕組みづくりはボランティアに頼ってきたどの分野でも始まっています。生活困窮世帯の増加、就学継続が難しい若者、心の健康が脅かされ虐待や自殺者増加など、社会が厳しい時だからこそランドスケープが与える人々への影響を考えると aaca の活動は大切なのではと考えます。従来の枠組みの制度では十分に対応しきれない複数の課題に直面した人々が自ら乗り越える為

に、施設ではない多世代の交流の場が全国に生まれています。ダイバーシティ・インクルージョン、そんなまちの居場所が広がれば孤立せずサポートに繋ぐ事ができると考えているので、まちの居場所へ誘う仕掛けにアートを積極的に利用していただけたらと思います。

展覧会委員会では aaca の特徴である”建築”に伴う美術・工芸であるという事を活かした作品展が出来たらと願っています。今年は『遊びの色と形』展が9年ぶりに復活します。建築関係の法人と作家が交流し、意見を交換できる場が生まれたりどんなに素敵かと思えます。コロナ禍でリモートばかりではスムーズな意見交換が出来ず残念でなりません。以前はパーティーで異分野の作家の方達から直に知りたい事(漆の種類や乾燥について、石の切断)を教えていただきました。ガラスと石で何か出来ないかと興味が広がった事で川越市の石彫体験では実際に大理石をノミとハンマーで削ってみました。美しい石は雨に弱く扱いも非常に困難である事が分かりました。いつか出来たらと思っている事が多いのですが、磁器とガラスと石の接合技術で平面から立体へと新たな表現が出来たらと思っています。

大学時代には、小池寿子先生から西洋美術の中で死がどのように表現されてきたかを学び、私なりに様々な祈りの造形表現を体感した中で、ようやく心に刻まれたメメント・モリやヴァニタスが身近なものとなり、嫌だと思いつつ目を奪われてしまう骸骨たちが少し可愛らしく見えてきた事で、ようやく作品に昇華出来そうな気がしてきました。娘が誕生してからハートのモチーフに惹かれ続けているのですが、上記の様な感情を思い起こさせるハート作品が出来たらと思っています。

<第3回フローラル展>
ギャラリーユニコン 2022年3月24日(木)～29日(火)
<スペースX展2022>
ギャラリー檜F 2022年4月11日(月)～16日(土)



石彫体験



ベルン(スイス)のサン・ヴァンサン 大聖堂にて



第4回BOX展出品作
「あなたのハートはどれですか 私は…」

30 年前の夢を改めて…

埼玉画廊
日本建築美術工芸協会会員 竹内春香

竹内春香と申します。飯田郷介様のご紹介で入会させていただきました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

実母が営む、埼玉県川口市の「埼玉画廊」で働いています。1997年に開業しました。

埼玉ゆかりの作家を中心に、年に10～12回の企画展を開催しています。主には、近現代の洋画が中心ですが、日本画、彫刻、版画、現代美術も幅広く紹介しています。今後は、現代美術の方にもより力をいれていきたいと考えています。現代美術専門のホームページを立ち上げただけです。

自社の画廊やアートフェア、公共施設での展示会を企画し、作品を販売することが主な仕事です。その他、作品とそれに合った展示空間の提案、査定・買取などもしています。

今後は、海外のアートフェアに出展するのが目標の一つです。また、昨年株式会社21世紀文化芸術研究室という会社を立ち上げました。美術館の設計や運営、研究、執筆にも力を入れていくところです。

生まれも育ちも埼玉県川口市です。学生時代は、ソフトボールやバレーボールをしていました。大学は体育会バレーボール部です。現在の家族は、夫と、来春から中学生になる娘と小学4年生になる息子がいます。これといった趣味はなく、休みの日は美術館巡りや知り合いの作家の展示会巡りをしています。空いた時間は鍼、家事、読書、息子のサッカーの試合の付き添いなどをしています。お蕎麦とお蕎麦屋が好きなので、美味しいお蕎麦屋さんがあったら教えてください。

人生で、初めて将来になりたい職業を考えた時に、ぱっと思っただのが、「建築家」でした。中学生の時です。その後特に追いかけることもなく今に至っていますが、この度のご縁で、日本建築美術工芸協会様で、建築や環境など、色々なことを学びたいと、とても楽しみにしています。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



埼玉画廊ギャラリー



GALLERY CAFE 'ART MEET Netz' (埼玉県さいたま市)
(カフェのコンセプトの企画、絵画の提案と内装を担当)

私にとっての2021年

造形作家
日本建築美術工芸協会会員 金原京子

今日までいろいろな制作活動をしてきました。昨年のコロナ禍の中でも、私にとっては発表の機会に恵まれたものになりました。

3月には、さいたま国際芸術祭（プラザウエストギャラリー）で個展を開くことができましたことに感謝しています。（写真1、2）前年にも同様の芸術祭に参加することになっていましたが、中止となってしまいました。6月には、BOX展に初出品し、そこで何と《不思議の森》（写真3）がオーディエンス賞をいただき、今にいたっています。7月には、神保町のアートギャラリーレジオンで私のPETボトルの大きなハイヒール（約180cm 写真4）を展示していただきました。9月には、私が所属しているCAFネビュラの地方展「びわ湖展」が中止になってしまいました。10月には、以前から描いていました日本画それも抽象画が中心の「古代の記憶 JOMON」とPETボトルの作品を展示した「日本画からペットボトルへ きんぱらきょうこ25年の軌跡展」が、私の地元調布で約二か月あまり開かれました。（写真5）そして11月には、埼玉県立近代美術館で開催されました

CAFネビュラ展に《人体—その先にあるもの》（写真6）を出品しました。

私は、現代のIT化、そして「もったいない」という時代背景の中で、初めてPETボトルを素材として使用することを思いつき15年ほどたちます。最初は、ただただ鋏で紐状に切った物でしたが、PETボトルの特性が解るようになりました。熱で変形させたり、ホットカッターで透かし彫りをしたりと工夫して、今では細く紐状に切った物をカギ棒でクサリ編みにして、うねった状態の物を熱であぶりながら真っすぐな物に延ばして形に巻きつけて作品にします。そこにLEDの照明を入れたり、あてたりします。さいわいLEDが熱くならないのでPETボトルには適しているのです。

12月から今年の9月まで越生（シューマギャラリー）で2人展が開催されています。（写真7）野外での表現展の一環で、私はたくさんのPETボトル（約120）の蝶をコンクリート打ち放しの円柱ドームの中に展示しました。天井から照明をかけます。影が下にできて楽しいものになったと思っています。



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7

「今」と言える未来に…

造形作家
日本建築美術工芸協会会員
石垣 健



コロナ禍で外出もままならぬ中、開催に踏み切った新制作展、そのSD部に、30年ぶりに応募をしてみました。この疫病のさなかの“開催に一票を…”という思いが、背中を押してくれました。思いだしてみれば、初入選は1976年、はやあれから四十数年？ なんといつのまにか「今」と言える未来に来ていたというわけです。

出品させていただいた作品『COEXISTENCE』は、「ステンレス製の幹と枝のような構造の先端に、ゆがんだ果実のような形の樹脂を取り付けた構法で、水中から泡が立ちのぼるような流体的変形をさせた姿の作品です。」

こう書かずとも、写真を見れば解るわけですが、人間の自然言語力というのは、誰でも天才的で、この説明を基に、機械でも理解できる、異常なほど懇切丁寧な人工言語に書き直すと、お手持ちのコンピューターでも理解できる、3D造形プログラムとなるわけです。

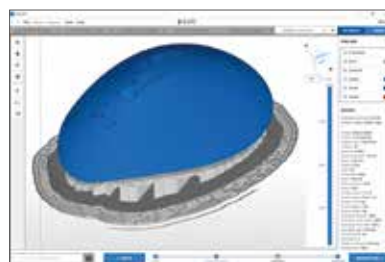
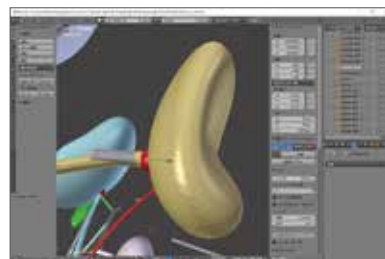
このプログラムを作動させて、極端に異なる大きさの果実や、それらが相互に影響し合い、ゆがみを重ねて行く様子を見てみると、コマンドのパラメータを指先で変えるだけで、果実相互の近接関係が激変し、絡みすぎたり、ひどくうち伸ばされたりするので、プログラムの書き手としてはなんとも心痛む時すらあります。

そんな手加減とは異なり、ほとんど感情に流されること

のないFDM (Fused Deposition Modeling / 熱溶解積層)方式の3Dプリンターは、ポーランド生まれで、まだ5年ばかりの付き合いですが、熱くても実に冷静で、完成した実制作用の「造形譜 (3Dの設計データ)」を丁寧に読み取り、その痕跡と共に、程よく解釈の自由も残してくれる、良き相棒です。昔は、積層模型やフライス加工の雌型で実制作をしていましたが、「未来」に来てみて、このサバサバした関係は、なかなか良いものだと思われました。

さて、入選はしたものの、階高のある国立新美術館での展示は、初めてのこともあり、多くの方々にお世話になりました。感謝の限りです。私の予測が甘く、天井との空間を仕切り損ねたのが、なんとも心残りで、反省しきりです。

会期中は、互いの自粛で、平日は実に閑散とした展示会場でしたが、誰もが、今、この時も、お互いに「自分の居場所」を再考しているのだと思えば、この招かざる状況がしばらく続こうとも、天変地異を伴う温暖化よりは、まだましなのだろう…などと、煌々と照らされた会場を見渡しながら考えていました。災いが続くのは困りますが、ただ元に戻るだけでは、すでに、この代償は大きすぎると思います。長い目で、しっかりと事実を見据えて、今度こそ本当に、危機に救われたと思えるような、足元からの日常の再構築を、次の世代が「今」と言える未来の為にも、慌てず着実に、「持続する生活」を具現化していきたいものです。



「2021CAF ネビュラ展」開催報告

造形家、新制作協会会員
日本美術家連盟会員
CAF.N 協会会員
日本建築美術工芸協会会員
野口真理



2021年秋コロナ禍、埼玉県立近代美術館で予定通り展覧会が開催されました。

この展覧会は埼玉県在住作家はもとより全国に会員がおり作家の自由意志を尊重して毎年、隔年、数年おきと選択できるように考えられています。

国立新美術館（東京都）では、同年春大きな公募団体展等が直前で開催中止となった年でした。運よくやや落ち着いた季節に例年企画されていた当展覧会は問題なく開催初日となりました。地方の美術館で比較的慎重な対策が取られており検温、来場者カードを記入しての入館対策をしていました。

2021CAF ネビュラ展では後援を、日本建築美術工芸協会、

埼玉県内の行政、地域のメディアから受けています。ワークショップを野外で企画した日には、行政担当者の方が、見学に来られていました。またテレビ埼玉が地域ニュースの時間帯に放映、毎日新聞さいたま支局の取材があり誌面に掲載されました。

aaca 会員で参加している作家、作品を紹介します。

実施期日 2021年11月3日（水）～11月14日（日）
ワークショップ「しめかざりつくろう」
11月7日（土）北浦和公園内
実施内容 現代美術展示
参加者及びその人数 入場者 3203名 出品者 95名
ワークショップ約 120名



長沢晋一 「PLATE 2021」183 × 243cm



金原京子 「人体—その先にあるもの」
45 × 22 × 43cm



野口真理 「つちのハナ」150 × 50 × 200cm



甲谷 武 「White illusion」183 × 184cm



小野寺恵美 「CLAY WAVE -誘う土—土の花片」
150 × 200 × 60cm



犬飼三千子 「My world」
180 × 160cm



ワークショップ風景 北浦和公園内



会場風景

2022CAF.N 金沢展
2022年5月31日（火）から
6月5日（土）開催
会場 金沢21世紀美術館
市民ギャラリー B室

第30回 AACAA 優秀賞を受賞して

建築家
納谷建築設計事務所
日本建築美術工芸協会会員
納谷 学



2020年、私達が設計監理した「尼崎パーキングエリア」が映えある AACAA 賞の優秀賞をいただきました。

「尼崎パーキングエリア」の計画地は、阪神高速3号神戸線線り・高架上です。高速道路の距離料金導入に伴い、尼崎本線料金所が廃止されたことによって残った南北約20m、東西約400mのスペースです。

ここに新たに24時間営業のパーキングエリアが求められ、私達の案が設計コンペによって選ばれました。

私達が提案したのは、滑走路のような高架上の敷地を緑化フェンスや芝生、植栽によって緑化し、利用者が安らげる公園のようなパーキングエリアです。

計画建物は、奥行き6m長さ160mの細長い平屋の建築とし、利用者が降車してから施設までの距離を最短にして、高速道路上の安全を確保しました。160mの長い建築は、高架のエキスパンションジョイントを4箇所またぐことになりました。ちょうど電車が5両連結しているような状態です。

また、計画建物は地上15mにあるため、耐風圧強度など相応の強度が求められました。特に耐震強度は、過去の経験と高架上などの条件から、通常より高い耐震性能が求められました。つまり、平屋にしてははずいぶん骨太のプロポーシオンの構造体になったのです。

でも、私たちが提案したい建築は、軽やかな庇を持つ縁側的な空間です。5棟の連結した構造体は、それぞれが余条件を満たしながら軽快に繋がらなくてはなりません。適切な壁や柱を配し、内部プラン(コア)はエキスパンションジョイントを避けて配置しました。

建築を東側でクランクさせ、緑化フェンスとの間に静かで落ち着くハナミズキ広場を造りました。また、グランドレベルは緩やかな勾配によって1m程かさ上げしました。かさ上げた公園には大きな木を植え、高速道路上とは思えないような林をつくりました。

西側の駐車スペースは土木スケールですが、クランクさせて生まれたハナミズキ広場は、高くなったグランドレベルと階高を抑えた建物によって建築スケール(ヒューマンスケール)へとゆるやかに変換させています。

このクランクは、土木スケールから建築スケールへ、動的空間から静的空間へ、喧噪から静寂へ、人工から自然へと空間を変換します。

土木である高速道路上に、さまざまな操作によって建ち上がった建築が、利用者に高速道路上だということを忘れるくらい心地よく働きかけられればと思います。

また、2021年は福岡の東峰村で設計監理した「あんたげ」が、AACAA 賞に入選をいたしました。

九州北部豪雨によって甚大な被害を受けた東峰村が、古民家を1日一組限定の宿泊施設にリノベーションしようというものです。

「あんたげ」とは、あの辺りの方言で「あなたの家」という意味だそうです。私達は、150年以上の間に増改築が繰り返され放置されていた古民家を減築して本来の古民家に戻し、大きな土間空間を挿入して棚田を流れる風を取り込み、小屋裏と繋がる吹抜けを提案しました。東峰村の復興事業の旗手として、「あんたげ」が多くの利用者と村民を繋ぎ、コミュニティの場となることを願っています。

日本建築美術工芸協会に入会してまもない私達ですが、今後も協会に所属する一員として、建築作品を通して世の中に貢献できればと思います。今後とも宜しく願いいたします。



写真撮影：富田英次

第30回 AACCA 奨励賞を受賞して

マル・アーキテクチャ
日本建築美術工芸協会会員
高野洋平・森田祥子



松原市はかつて西の松原と謳われた、全国でも図書館活動の盛んな街でした。決して大きくない16km²の市内に8つの図書館を、行政のハード整備ではなく市民活動が先行して作り上げた歴史があります。しかし少子高齢化や施設老朽化により将来に渡る機能維持が困難とされ、中央館へ統合されることから、このプロジェクトが始まりました。

現在、近代に建てられた名建築も高度経済成長期に整備された公共施設も次々と解体され再編されています。近代以降の建築は単に歴史が浅いという理由で文化財的価値が認められにくく、また加速度的に変化する社会ニーズや技術進歩に対応が困難と考えられるためです。一方でストック活用の重要性も見直されており、新たに公共施設をつくるにあたって、永く時代を超えて生き残る建築がテーマであると考えました。このテーマには、身近にあった図書館が統合され、まちの文化が縮小していくような松原市民の不安に対して、決して失われない場所を建築が体現するという目標も含まれています。

敷地は現在も使われている農業用ため池の一角です。エリア一体が文教施設の並ぶ都市公園となっており、それらは広大なため池を少しずつ埋め立てて造られてきました。本プロジェクトもプロポーザル段階では埋め立てて建築することが想定されていましたが、ため池の風景や憩いの場を遺すために、埋め立てをせず池の中に建てることを提案しました。これにより工期やコストの削減に加え、ため池の持つ都市環境的価値を再発見しています。

松原市は市内に多くの古墳が点在しています。古墳は土木的なスケールの巨大な人工物ですが、永い時間を経てあ

たかも自然物のように振る舞い、住宅街の背景に溶け込んでいます。永い時代を超える建築として、この古墳の佇まいに着想を得て、建築のスケールを超えることで、超人工的／超自然的な在り方を目指しました。600mmの分厚いカラーコンクリートの外郭が池の中から立ち上がり、内部空間を大らかに守りながら、背景としてまちの風景に溶け込みます。コンクリートの型枠に荒ベニヤを用いて、建った時から経年したような風合いのある表情とすることで、建築が過ごす永い時間を感じられるものとしています。

行き交う人々、自転車や車、少しずつ造り替わる都市やインテリア、堅く動かないコンクリートの壁、常にさざめく光や風など、異なる時間軸を持つ要素が可視化され、ひとつの環境として同居することで、時代を超えて親しまれる場を目指しました。開館から2年、コロナ禍に翻弄されつつも松原市民松原図書館は市民の居場所として根付いています。

私たちは現在、登録有形文化財を含む民家の保存改修に取り組んでいます。既存民家の価値の継承と向上を前提としつつ、新しい時代へと建築をリレーションしていくために、単に既存を補修するのではない大規模な遣り替えを提案しました。松原市民松原図書館と同様に、遣り続ける部分と時間の変化に追従する柔らかな部分を同時に持つことで、様々に形を変えながらも時代を超えていく場となることを試行していきたいと考えています。



撮影：Kai Nakamura



撮影：Takuya Seki

第30回 AACCA 美術工芸賞を受賞して

UDS 株式会社
COMPATH ゼネラルマネージャー
日本建築美術工芸協会会員
富山晃一



日本の中の海外

自社運営ホテルの設計統括を機会に、約5年前に沖縄に拠点を移し、建築設計や空間デザインを行なっております。

沖縄に拠点を移して最初に那覇のまちを散策した時、今まで経験したことのない独特の雰囲気を感じました。特に、人々の生活の延長上に外部空間が位置付けられている風景に、日本語の通じる海外だと捉える方が適していると感じました。

その後、沖縄に滞在する中で、150年ほど前までは琉球王国という日本とは別の独立国だったこと。その王国は、中国や日本をはじめ、東南アジア諸国との盛んな交易を通して繁栄し、その中で染織などの独自の工芸文化が発展していったこと。戦後のアメリカ統治下時代には、琉球ガラスのような新たな工芸品が生まれたこと。などを知り、これらの複層的な要素が絡み合い、現在の沖縄独特の雰囲気と文化が育まれてきたのではと理解するようになりました。

ホテルストレータ那覇 / HOTEL STRATA NAHA

美術工芸賞を受賞させて頂いた「ホテルストレータ那覇」は、そういった沖縄の文脈を踏まえて、より本質的な沖縄らしさを空間を通して体現することを目指したホテルです。

琉球王国時代に計画地周辺は海の中だったこと、そこに長虹堤という海中道路が建造され交易の主要交通路となっていたこと、その痕跡が敷地の前面道路として残っていること、などの土地の文脈を踏まえて、場所に積層された地質や文化を引き上げたようなダイアグラムを考えました。このホテルは、英語で層や地層を意味するSTRATA（ストレータ）と名付けられ、そのモチーフが空間の各所で表現されています。

都会の中でも沖縄の豊かな自然を感じられるアーバンリゾートを目指し、「Ryukyu Nature Modern」をデザインコンセプトに掲げ、建材には琉球石灰岩や赤土や泥（クチャ）の左官などの沖縄独自の素材と色彩を多用しながら、土着的かつモダンな表情で新しい沖縄らしさを表現しました。

内部空間の随所には、首里織、琉球紅型、琉球ガラスなどの沖縄伝統工芸を取り入れており、それらの工芸作品はすべて地元作家との協働によりオリジナルで製作しました。クッションやフットスロー、照明器具など、工芸品を単なる装飾品としてではなく、空間デザインや機能の一つの要素として取り入れています。また、それら地元作家との協働の中で出会った図案やパターンを、外装ルーバーや花ブロックの配列などの建築デザインのモチーフに取り入れ、分野とスケールを横断したデザインの融合を図りました。



客室（ストレータスイート）



首里織の図案を用いた外装



地元作家との協働による空間づくり

まちづくりにつながる企画・設計・運営

このホテルは、企画・設計を担った我々UDSによって運営されています。施設の企画設計から運営まで一貫通貫で手がけていく独自のスキームにより、施設のコンセプトを継承し、さらにはまちづくりや施設周辺の地域価値の向上にも繋がっていくことを目指して活動しています。UDSの設計領域も横断的で、建築設計からインテリアデザイン、ランドスケープ、家具製作、備品・アート選定までを一社で担うことで、各分野を横断した総合的な空間づくりを可能にしています。

同様の手法で、沖縄県内ではホテルストレータ那覇以外にも3つのホテルの企画・設計・運営を行っています。厳しいご時世ではありますが、ぜひ来沖して頂き、私たちの提案する施設づくりをご体験頂ければ幸いです。



ホテルロビーラウンジ



左官アート

吉田鉄郎の京都中央電話局と新風館

アーバンエコロジー研究所代表
元NTTファシリティーズプリンシパルアーキテクト
日本建築美術工芸協会会員
横田昌幸



はじめに

京都新風館は、旧京都中央電話局を保存活用した形でエースホテル京都を中心とした複合商業施設として2020年7月に再オープンした。大正14年に完成した吉田鉄郎設計の旧京都中央電話局は、2000年にリチャードロジャーズとNTTファシリティーズの設計で商業施設「新風館」としてコンバージョンされているので、2度目の再出発である。欧州においては、歴史的建築物が長い歴史の中で様々に手を加えられながらも用途を変え、記憶を重ねて使い続けていくことの価値が共有されているが、スクラップアンドビルドが相変わらずの日本においては、新風館は貴重な事例である。京都ならではの事もあるが、京都中央電話局は近代建築史上極めて重要な位置付けを持つ建物である事は間違いなく、躯体がほぼそのままの形で保存活用された意義は大きい。本建物は初期の鉄筋コンクリート(RC)造建築ながら、本格的なRC造で、構造躯体にほとんど手を入れずに活用できたのも大きな特徴でもある。私はこの建物はその後の吉田モダニズムの起点となる画期的な建物であると考えているが、本稿では、特に日本の近代建築の中での「日本独特の鉄筋コンクリート造のはじまり」という構法的な観点からの重要性に触れる事により、基礎を含めた構造躯体がそのままの形で残されたことの意義を強調したい。

京都市登録有形文化財建造物第1号

本建物は京都市登録有形文化財建造物の第1号で烏丸通側の銘板には自動式電話交換創始の地とあり、技術産業史の観点から文化財としての価値が置かれている。昭和3年、京都と大阪同時に自動交換が開通する訳であるが、当建物には自動交換機を収容するために、無柱の大空間と防災、環境設備が施されていた。この時期、近代設備を収容し機能させるインフラとして時代の最先端を行く建物であった。また事務作業室でもあり、蛍光灯照明設備などのない時代においては、昼光率を計算して、昼間の自然採光だけで十分な作業照度を得られるように大きな窓が設けられていた。一方で防災上の観点からは鋼製の大型防火シャッターがつけられ、粉塵を嫌う自動交換機械のために窓には二重のサッシがつけられていた。また夏期の高い湿度によって誤作動を起こすことを避けるため、除湿のためのアドソール空調機が導入され、日本で初めての空気調和設備を持つ建築となった。

関東大震災後の復興電話局、京都新上分局の構造との対比

大正8年の関東大震災は都心の電話局の7割に壊滅的被害を与えた。通信省は復興にあたって極めて強靱な局舎を求めた。当時完成したばかりの日本興業銀行が殆ど被害を受けなかったことに着目し、その設計者の内藤多伸博士を招き、震災復興型標準局舎を設計する。この時画期的だったのは、これから増大する電話需要を見越して、フランスから自動交換機を導入し、復興局の全てが自動交換局として新たに計画された事である。また同時に、関西でも復興に合わせて自動交換機が導入されることになり新局を建設した。旧京都中央電話局はその一つである。内藤多伸は耐震壁付RCラーメン構造で名高いが、この標準局は、耐震要素として使える壁は全てRC造を使うという考え方であった。大正時代には既にRC造で建築は作られ始めていたが、柱梁のフレームはRCであっても、レンガや木造、鉄骨造を併用する混構造と言って良いものだった。同じ吉田鉄郎によって設計された京都新上分局（大正13年竣工。京都市指定登録文化財建造物で現存。）の平・断面図を見てみると当時のRC造の状況が良く分かる。色付けされた立面図に平・断面詳細図が表されているが赤く色付けされているところはレンガ造であり、柱間の張壁や窓下の腰壁などレンガが多用されている。また屋根の小屋組は鉄骨造である。

旧京都中央電話局における鉄筋コンクリート造

京都の自動交換新局建設では、吉田鉄郎が設計をするこ



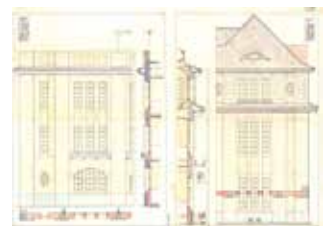
新風館（エースホテル京都）2020



旧京都中央電話局 大正15（1926）



京都中央電話局新上分局 大正13(1924)



京都中央電話局新上分局 立断平面図

となるが、構造設計についてはこの耐震設計を踏襲している。京都中央電話局の構造設計断面図には柱断面を示す平面詳細も併記されているが、袖壁は柱と一体化され壁柱となっており、腰壁は垂れ壁と一体となって壁梁（ウォールガーダー）となっている。レンガは一切使われていない。10mを飛ばしている2階、3階の梁の両端には意匠的に異なった大きなハンチがデザインされており、配筋なども現在とは異なり、放射状に入れ、試行錯誤を読み取ることができる。また、寸法表示は全てメートル表示となっており、先の京都新上分局の寸法表示が尺表示となっていることを考えると、この時点が通信建築におけるメートル表示への転換点であったことが解る。

「日本の」鉄筋コンクリートのはじまり

これ以降、逓信省の電話局舎においては、一体型のフルRC造で作られて行くが、その強靱な躯体と防災対策により、多くが第二次世界大戦の戦禍の中を生き延び、通信を守った事は特筆に値する。フルRCの耐震構造は、型枠大工により、精密な仮枠が組み、各階コンクリートが一体化して打ち上がっていることで剛性が確保され強靱なコンクリート躯体が出来上がる。建築構法学の内田祥哉先生によれば、私たちは現在あたりまえに思っている事であるが、これは、日本には優秀な大工がいたからできた事であって、外国では真似のできない日本独特の耐震鉄筋コンクリート構造であるということである。



構造設計 平・断面図



3F 自動交換機室アーチのハンチデザイン



2F ハンチのデザイン

小梁のデザイン

ハンチや梁組など特徴的な構造躯体形状のデザイン

旧京都中央電話局は、このように日本の近代建築の魁であると同時に、その後の「日本の」鉄筋コンクリート造の魁であった。吉田は鉄筋コンクリートという材料と工法で如何に造れば良いかを追求した。現場打ちで自由な形状をうみ、躯体そのものの形状の合理的なデザインを模索した。部屋内の意匠で言えば、天井無しの意匠なので躯体現しとなり、スラブや梁組などの躯体デザインを徹底的に意識して造っている。これはアーチ型ハンチなどに見てとれるし、小梁の配置やスラブと梁の取合いには現場打ちで大きな面取りを施している。その後の東京中央郵便局の躯体フレーム形状においては、シンプルで合理的なものに収斂していくのである。2000年時の初代新風館においてはこれらの躯体フレームに手を加えず現しにして見せる保存手法を取り入れて、店舗デザインを展開している。

エースホテルへのコンバージョン

2020年、エースホテルへのコンバージョンにおいては、一部店舗を除きこれらの躯体デザインの多くは新たな内装材によって覆われ、見ることは出来なくなってしまったが、この旧棟の空間的豊かさが活かされ、ハイグレードなゲストルームとして作り込まれている。大きなアーチの窓は、意匠はそのままに、床までの掃き出し窓となり、部屋とまちとを繋いでいる。また保存棟に合わせた3階までの大きな階高は建物全体の低層部の空間的な豊かさに結びつき、中庭の空間を介して新旧をつなぎ、新たな風景を生み出している。旧京都中央電話局は、その躯体の強靱さと、高い階高と無柱の大空間という包容力により、新たな機能と人々の活動を収容し、新たな歴史を刻み始めている。

参考文献：

「国際的に特異な日本の鉄筋コンクリート」現代建築の造られ方、内田祥哉、2004.03
吉田鉄郎の近代—モダニズムと伝統の架け橋、文化庁国立近現代建築資料館、2019.11
通信建築アーカイブス、NTTファシリティーズ

株式会社 石本建築事務所 Part II

広報委員会

■ はじめに

今回は本シリーズの第2回目です。

第1回目では、建築家石本喜久治が東京帝国大学工学部建築学科を卒業し、「分離派建築会」の活動を通して建築家を志し、竹中工務店設計部を経て独立し、石本建築事務所を立ち上げるまでを概観しました。石本建築事務所には多くの若き建築家達が集い、石本は建築設計界でリーダー的存在を担っていきます。

■ 第2の時代へ

昭和12年(1937) - 昭和19年(1944)は、東京朝日新聞社までの第一の時代を脱皮し、白木屋以降の、形を機能と合理性に結びつける第2の時代の幕開けとなります。

石本は「日本インターナショナル建築会」の発起人の一人として近代建築運動の推進役としても活動し、外国人会員であるブルーノ・タウトが来日した折には案内人の役を務めました。

この時代の代表作である旧横須賀海仁会病院(1939)は、海軍の下士官や家族の診療を行う病院として計画されました。敷地に合わせて外壁が弧を描く湾曲した形態が美しい建物で、当時所員だった立原道造が設計に携わり、外観パースやタイルの割付などを担当したそうです。ゆるやかにカーブした廊下の両側に配置された病室、やさしい傾斜の避難スロープなどモダニズム・デザイン溢れる詩的な建築は、平成25年(2013)にDOCOMOMO Japan(ドコモモジャパン)の「日本におけるモダン・ムーブメントの建築164選」にも選定されています。

■ 戦火の跡からの再スタート

一方、日本は日中戦争を皮切りに、時代は第二次世界大戦へと突入します。

そして迎えた終戦。昭和20年(1945)、東京駅八重洲口にただ一つ焼け残っていた武田京橋ビルの一角で石本建築事務所は再スタートします。石本は長野八三二と事務所を共同経営します。そして焼土と化した都市を目の当たりにし、戦後の復興期で不足していた住宅の供給に力を尽くすべく日本住宅株式会社を創立、社長として自ら設計した最小限住宅の販売に取り組みます。しかし復興期の日本では戸建住宅の供給はまだ時代が早く、結果軌道に乗らず昭和25年(1950)に会社をたたみます。一方、石本建築事務所から住宅公団に提出した最小限アパートのプランが高く評価され、全国の各都市に店舗付き市街地住宅を設計していくこととなります。

その後、日本は戦後の混乱から脱却し、復興にむけて石本建築事務所も日本経済の上げ潮に乗り発展を続けますが、その中で石本は建築事務所の永続的な発展の道を模索し続けます。そして「将来設計事務所というものがその創設者たる一建築家の独創と独走によって支配しつづけられるのはもはや一代限りであり、設計対象が大型化し複雑化・多様化するに従い、専門分野を充実し設計対象の複雑化・多様化に対応できる組織体へ移行すべきである」との考えに達します。

昭和26年(1951)、設計事務所を法人化し、「株式会社石本建築事務所」への移行を実現します。これが日本で最初の近代的な大型設計組織体の誕生となるのです。



図1 旧横須賀海仁会病院



図2 当時の事務所風景

■ 高度経済成長期での発展「株式会社 石本建築事務所」

戦後、石本建築事務所が組織事務所として発展していく上で重要な仕事となったのは市町村の庁舎の設計でした。昭和28年（1953）の町村合併で新しい市が数多く誕生し、新しい民主主義のシンボルとして復興にともない大量の庁舎が建設されました。

その後に続く高度経済成長期では、各市の発展とともに爆発的な建築ラッシュを迎えます。石本建築事務所は時代と共に国民生活に必要とされる建物をいち早くキャッチし、建築として具体化していきました。市町村庁舎の設計では時代とともに大規模になり複雑化していく庁舎に要求される建築の諸条件に、機能性をデザインに組み入れた、巧みなプランニングによって見事に応えました。

<娯楽><文化>施設にも積極的に取り組み、文化会館や運動施設などそれぞれの新しいプロトタイプを創造していきます。

時代の要請に応え、常に“良き建築”を創る。若き頃の理想を石本喜久治は時代の推移の中で実務として実践し続けます。時代の先を読み果敢に挑戦し続けた石本は、昭和34年（1959）、「建築設計監理業界において常にリーダーシップを保持し、我が国における多大な貢献をなした功」を称えられ、藍綬褒章を受章しました。

その後、石本建築事務所は高度経済成長の潮流の中で全国に拠点を開設し、そのネットワークの下、公共性の高い多彩な設計活動を次々と展開していきます。

昭和38年（1963）にこの世を去るまで、石本は事務所を支え続けました。

（文責：三上紀子）



図3 工業繊維大阪支店（1951）



図5 広島市民球場（1957）



図4 長岡市庁舎（1955）



図6 三鷹市庁舎・議事堂・公会堂（1965）

第 15 回 aaca 京都建物視察会に参加して

建築家
A・Aプランニング代表
日本建築美術工芸協会会員 青木恵美子

11月2、3日と京都建物視察旅行に参加いたしました。盛り沢山の見学ツアーで想像以上のハードスケジュール。コロナで密になるバス移動は避けて電車と徒歩の視察ということで、毎日15000歩という充実のツアーでした！

2日朝6時半の品川発の新幹線で8時半に京都に到着。各自地下鉄に乗車し京都市京セラ美術館前に参加者40名が9時半集合しました。(集合写真1)美術館開館を待ち10時に入館し、設計者であり館長の建築家青木淳氏からビデオ付きのお話を伺いました。青木氏によると以前の美術館は入り口が狭く大展示会の時は雨の中、傘をさして並んで入館しなくてはならない状態であった。それを解消するために入口を拡充し広場「京セラスクエア」として、美術館が周囲とつながる憩いの場所を確保した。屋外コンサートやイベント、パフォーマンスなど人が集う場所として、リニューアルのシンボリック場所にされたそうです。帝冠様式の重厚な歴史的建築物にガラスのファサードを足元に纏い、歴史を重層する空間が人々が溜まれる場所となり、観賞後寛いだり語り合ったりできる。美術館はただ鑑賞するだけでなく、そこでの時間を提供する場所だと思います。建築家青木氏が創った人々の憩いの場所であることを実感しました。(写真2)

名残惜しい京都市京セラ美術館を後にして、地下鉄と路面電車の嵐山電鉄(嵐電)を乗り継いで渡月橋のある嵐山

へ。嵐山のレストランでランチですが、京都らしい湯豆腐御善で京都をいただきました。昼食後は、近くの福田美術館とMUNIホテル。こちらは建築家安田幸一氏設計でまたまた安田氏自らのご案内です。福田美術館とMUNIホテルは道を介して向かい合いにあります。設計がほとんど終了しオーナーにプレゼンしたところ、美術館とホテルの場所を入れ替えようと言われ、設計し直したという設計の苦労談を。またこの美術館とホテルの前面道路は低い場所であり、今時の大雨浸水の危険からいろんな工夫がされているようですが、美術館の1.5M塀はその浸水を防ぐために設けられたようで、建物とマッチし足元を装い安心感を与えているような気がしました。ホテルの中には白の庭と黒の庭があり白い石と黒い石をカットして京都らしい石の庭を表現しています。美術館は琳派から与謝蕪村、若冲という絵師の所蔵が主なのですが、このような日本画は展示照度が大切にライティング照明計画に苦労されたそうです。また安田氏は特別に中庭の水盤に案内してくださり、浮いた石の秘密も説明くださいました。こじんまりとしたホテルと美術館ですが、場にふさわしい建物でした。(写真3)

1日目の最後は、京都高瀬川沿いの立誠小学校をリノベーションした立誠ガーデンヒューリック。(写真4) 京都には明治維新後「番組」という町民達の住民自治組織があり、そこに創設されたのが番組小学校で64あったそうです。そ



集合写真1



写真3 福田美術館中庭



写真2 京セラ美術館外観



写真3 福田美術館中庭



写真4 立誠ガーデンヒューリック

の中の1つの立誠小学校は1928年にロマネスク様式で建設されたが、住民の寄付もかなりあったようです。そのため今回のホテルも一部既存を残しつつ新しいホテル棟を建設したが、事業主ヒューリックと地元の連合会が共同合意して可能になったようです。京都を守る地元の意識の高さには驚くばかりですが、だからこそ良い街が継承されるのだと思いました。さらに素晴らしいのが、この建物に囲まれる中庭。若者や子供連れが楽しそうに芝生に座り込んで夕暮れ時を楽しんでいました。市民の憩いの場です。折角来たので、ホテルの最上階のバーに上がりビールを1杯、京都市が一望できるバーで黄昏時を楽しみました。

2日目は3つのグループに分かれて地図片手の街歩きでした。まず、内藤廣氏設計の京都鳩居堂。残念ながら開店前中で中を拝見することはできませんでしたが、ガラス越しに中を覗きこみました（怪しい集団です）。外観はしっかりと京都の街に馴染んでいました。次は新風館へ。京都の中心地烏丸御池にあるシネマや店舗などの複合施設のリニューアルですが、木縦格子の外観が京都の街に溶け込み伝統と革新を継承しているように思えました。（写真5）その後、ホテルヒラマツを見つけ、怪しい集団が写真をパチパチとっていると仲居さんが出てきて、入り口だけならいいですよ〜と中に入れてくださりロビーに。京町屋をリノベした古い建物の天井裏の梁には上棟時の弊串が見られ建物の歴史

を物語っていました。（写真6）

それから延々と歩いて秦家へ。女将の秦さんの流れるような丁寧な解説をいただきました。表屋形式という間口狭く奥行きのある昔ながらの京都の町屋スタイル。土間と店舗、奥には中庭のあるプライベート空間が広がり、今なお住みながら家を保存している秦家に感動！さすがの京都市有形文化財の家でした。（写真7）

時間がだんだんなくなってきたので大急ぎで最終目的地の藤森照信氏設計の徳正寺矩庵へ。阪神淡路震災で壊れた茶室を2018年に藤森氏がツリーハウス形式の茶室に。女将さんが煎茶を入れてくださりながらツリーハウス矩庵のエピソードを沢山伺いました。（写真8）

2日目午前の街歩きは終了し3グループが集合しランチ。美味しいしゃぶしゃぶとお酒で足の疲れを解し、午後最後は京都国立博物館。新しい平成館でなく、古い博物館見学です。今は閉鎖中ですが解体中の様子などをじっくりと説明をいただきながら貴重な見学でした。大急ぎの視察旅行でしかもハードスケジュールでしたが、内容濃く再度ゆっくりと見に来たい！と思いながら新幹線で帰路につきました。

企画してくださった方、皆さまお世話になりありがとうございました。



写真5 新風館



写真6 ヒラマツ



写真7 秦家



写真8 矩庵

「第30回 AACA 賞受賞者紹介のつどい」の報告

表彰委員会委員長 可児才介

昨年は予期せぬコロナ禍に見舞われ、かろうじて秋口にオンラインで開催したこの「つどい」でしたが、今年は例年のように初夏に開きたいと思っていたものの、期待に反してオリンピックの時期をピークに、爆発的にコロナの感染者が増加してしまいました。結果、昨年と同じくオンラインでの開催を余儀なくされました。9月はいまだ緊急事態宣言が解除されない状況でしたが、第1回を開催した10月末には奇跡的に感染者数が激減して、街中에서도どことなく解放感を感じるほどの雰囲気になった状況が記憶に残ります。世間ではこの一年余で「リモート勤務」や「オンライン会議」など、インターネット利用のビジネス形態が瞬く間に一般化して、コロナ後もこのまま働き方が大きく変化するだろうと思われる中のオンライン開催でした。いずれの回も会場には20～30人の会員が対面で参加しましたが、オンラインはもちろんのこと会場で参加する方の申し込みや会費の徴収でPeatixを使ったことで事務業務も大幅に簡素化できたのが収穫です。またオンラインであることで東京だけではなく地方から参加していただく方も何人かおられて、AACAの活動の拡がりの可能性が見えたような気がします。ただ本来のこの催しの大きな目的である受賞者と会員の交流会は今年も残念ながら見送らざるを得ませんでした。

昨年のこの第30回 AACA 賞への応募は第1回を除いては最大の77作品に上りました。また数だけではなく、作品のレベルも全体にかなり高く、まさに選考委員泣かせの審査となりました。したがって受賞作品の数も絞り込みが難しく現地審査対象の16の入選作品の中から、いつもより多い12作品が選ばれました。2回に分けているとはいえ、わずかな時間で全員の受賞者にお話をいただくのはかなり大変ではありましたが、交流会が開けない分、その時間を使ってしっかりお聞きすることができたと感じています。

第1回は10月25日でした。ZoomWebinarの調子も上々でした。6チームのお話をじっくり伺うために中ほどで5分の休憩を入れて緊張感の持続を図ることにしました。最初は「芦原義信賞」を受賞した藤森雅彦さんです。ユニークな造形の住宅群の説明の後、ご自身の紹介がありました。優秀賞の永廣正邦さんのチームからは自身の斬新なオフィスの紹介を含めてコンバージョンの作品が、納谷学さんチームからは他の作品を含めて高速道路上の豊かな建築空間が、それぞれ紹介されました。奨励賞の勝山太郎さんチームからは発想を転換した屋外の学生ホールの作品を、藤村

龍至さんからは景観の中に映える保育園を、披露していただきました。今年で3回目になる美術工芸賞を受賞した富山さんチームからは沖縄のアーティスト達と協働しながら地域性を見事に表現したホテルのお話を頂きました。長い時間を感じさせない、充実した内容でした。

第2回は11月9日に開催しました。これまですっかりZoomにも慣れ、最近は順調だったのですが、この日は何故かいろいろなトラブルが重なり、オンラインは不調でした。それでもスタッフの努力で改善されたのですが、いつにないハウリング現象がなかなか収まらず、オンライン参加の皆さんには大変ご迷惑をおかけしました。開始後30分くらいで音量出力を絞ることで解消はしたのですが、その分ネット上では音声小さくて聞き取りにくい場面があった様で、申し訳なく思っています。この日の一番目はAACA賞を受賞された西澤徹夫さんチームの京都市美術館の大改造プロジェクトです。アプローチを地下階に設定するという大胆な発想を話していただきました。優秀賞の水上哲也さんからは緑豊かな環境の中に木の香りがあふれる豊かな子どもの空間がほかの街づくりの計画と共に紹介されました。奨励賞の森田祥子さんチームからは街中の池の中に浮かぶ図書館の作品が、坂東幸輔さんチームからは山間の村にある古民家のリニューアルの作品が披露されました。特別賞の塚川さんチームには、地震で傷ついて修復中の熊本城を、完成までの長期間一般の人に見てもらうための仮設通路の作品を説明いただきました。最後は美術工芸賞奨励賞の川辺さんチームです。工場の建設にあたり建築家が中心になり、アーティストを集めて工場をアートで包むプロジェクトです。

オンラインを基本にしたイベント計画は難しい点も多々ありましたが、コロナ禍のような災害下でもこのような文化的活動の灯を絶やさないというAACAの姿勢を守ることに繋がっていけば幸いです。



広報委員会だより

広報委員会 勉強会報告 ～夢の金融機関支店群見学記～



巣鴨信用金庫
志村支店外観

地域に根差す金融機関が、地域と関わるユニークな支店の建物展開を行っているという。

そこで、昨年12月、広報委員会+展覧会委員会の勉強会として、有志のメンバーと共に巣鴨信用金庫の志村支店・常盤台支店・江古田支店の3つの建物を訪ねた。

最初に訪ねた志村支店は志村坂上の旧中山道一里塚の近くに位置する。国道17号線を歩いていくと、突如目の前に虹が現れたような外観が目飛び込んできた。シャワーのような12色の層が印象的である。コンセプトは『虹のミルフィーユ』。一目見ただけでは金融機関とはとても想像できない大胆な造形だ。ビビットな外観に圧倒され暫しの間、歩道に佇む。支店の内部へ入ると真っ白な接客カウンターと明るい待合室。外光が注ぎ込み、道を行き交う人が壁全面のガラスの植栽越しに見える。天井を見上げると、吹抜けを通して空が見えた。

次に訪ねたのは常盤台支店。ロンシャンを思わせるカラフルでランダムな外観の窓が特徴だ。当支店のコンセプトは『24色のリーフ』。支店内部には7つの中庭が配置され、歩行のシークエンスを作り出す。店内に居ながら緑に包まれている感覚に陥る。接客カウンターに対して斜めに配置された待合室は、営業時間外はセミナー等にも使用できる設備がしつらえられ、多目的なスペースとして考案されていた。

最後は、江古田駅前の商店街の一角に建つ江古田支店へ。ファサードのカラフルな“スティック”群がアーティスティックな空間をつくる。コンセプトは『レインボーシャワー』。支店内部も心地よい空間。ここでもが大活躍。外部でもある

中庭空間には背の高い青い竹が潔い。全面ガラスの向こうには、商店街を行き交う歩行者や車が垣間見える。吹抜の天井に近い大きな窓からは外光が降り注ぎ、その向こうには青い空が見える。実は、中庭を挟んだ道路側の空間は、地域の人々が自由に使える場所として提供されており、とくに信用金庫に用いない人でも自由に入出入りができる仕組みになっている。見学した日は江古田商店街の歴史を辿る写真展が催されていた。

今回は三つ支店を見学させていただいたが、金融機関である巣鴨信用金庫の柔らかな発想とアートや建築へのあたたかい理解に驚いた。三支店ともに、街角に佇む姿はまさに“パブリックアート”でそのものである。一方、外観の大胆なフォルムからは威圧感やとげとげしさは全く伝わってこない。むしろ安らぎを感じ得る。見事に機能と造形が融合されている。

巣鴨信用金庫では、金融機関の建物のイメージを大きく変える、お客さんの居心地の良さを大切に、温かさを感じる店舗づくりを2009年より行っているそうだ。

『用事を済ますためだけに足を運ぶのではなく、用事がなくてもなんとなく入ってみたいくなる。入ってみたいからゆっくりとくつろげる。そんな地域の皆さまのためのスペースとしてご利用いただけたらという思いが込められています。』

出典) https://www.sugamo.co.jp/sugamo_em_book/_SWF_Window.html

そこには地域への愛情と関わり合いへの働きかけが感じ取れる。まさに<地域に開かれた>信用金庫である。

清々しい気持ちと共に大なるアートの力に触れることができた有意義な勉強会であった。

(文責：三上紀子)



常盤台支店外観



江古田支店外観



中庭のあるインテリア



地域をつなぐ
「フリースペース」

文化勲章・文化功労賞受賞（2021年11月3日付け）

文化勲章 個人元会員 絹谷幸二氏（会員1988年～2020年）（理事1988年・89年）

文化功労賞 個人会員 谷口吉生氏（1988年～現在）

■新入会員・会員の移動 2021年10月～2022年2月（敬称略）

個人情報保護法の定めにより、個人会員は氏名、所在地、法人会員は会社名・代表者・担当者氏名・会社住所・電話番号を記載します。

《新入会員》

個人会員	吉川 実	〒195-0053 町田市能ヶ谷
	北村温子	〒168-0073 杉並区下高井戸（再入会）
	宮崎 浩	〒165-0026 中野区新井
	百枝 優	〒810-0055 福岡市中央区黒門
	前田茂樹	〒540-0031 大阪市中央区北
	野村直毅	〒612-0869 京都市伏見区深草直達橋北
	佐々木達郎	〒150-0001 渋谷区神宮前
	須藤大輔	〒169-0076 新宿区高田馬場
	江口泰貴	〒605-0977 京都市東山区泉涌寺山内町
	森 明子	〒154-0004 世田谷区太子堂

法人会員	フィールド・クラブ株式会社	代表取締役 河崎紀行 デザイン部 清瀬光広	〒113-0033 文京区本郷 2-35-10 本郷瀬川ビル6階 TEL.03-6801-8373
	株式会社 ヘラルボニー	代表取締役社長 松田崇弥 マネージャー 大田雄之介	〒020-0026 盛岡市開運橋通 2-38 @ HOMEDELUXビル 4階 TEL.019-656-7394
	UAO株式会社	代表取締役社長 伊藤麻里 樽見優希	〒150-0031 渋谷区桜丘町 30-4-102 TEL.03-6455-1822

《会員の移動》

法人	担当者 変更	昭和テクノ フォーム(株)	横村克史(前 豊田泰裕)
----	-----------	------------------	--------------

編集後記

新しい年を迎え、会員の皆様の益々のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。昨年、日本建築美術工芸協会では、コロナ感染の合間をぬって、「第4回BOX展」、「aacaサロン（第4回、第5回）」、「第30回AACA賞受賞者のつどい（第1回、第2回）」、「景観シンポジウム」、「AACA賞公開審査」がオンライン及び参加人数を制限した会場を利用して開催されました。AACA賞では今回表彰式が開催できませんでしたので今年の定時総会の折に表彰式が行われる予定です。また、「第15回建物視察会」は、一昨年中止となった京都視察会が実施されましたが、例年の団体バス利用を取りやめ、公共交通機関の利用と徒歩による京都市内見学が実施されました。この様にコロナ感染防止対策を十分に行うなど、各委員会委員の皆様のご努力により無事実施することができ、多くの会員の皆様からご好評いただきました。今年も感染状況を見極めながら様々なイベントが開催されますので是非ご参加ください。

前号でもお知らせしましたが、協会のホームページ「会員紹介」のページでは、会員の皆様のプロフィールなどをご紹介します。ホームページから直接入力することもできますが、今回から申し込み用紙に記入いただき、広報委員会がホームページ入力することができるようになりましたので、お気軽にお寄せください。なお、「会員活動予定への掲載依頼書」も設けていますので、会員の皆様の個展、グループ展など活動のお知らせにご活用下さい。

(飯田郷介)

aaca 2022.4 no.92

発行人 会長 東條 隆郎
発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
〒108-0014
東京都港区芝 5-26-20 建築会館 6階
TEL 03-3457-7998 FAX 03-3457-1598
URL <http://www.aacajp.com>
E-Mail info@aacajp.com

編集 広報委員会
委員長 飯田郷介
副委員長 野口真理 田島一宏
委員 五十嵐通代 金原京子 工藤康博
竹生田正 竹内春香 中村弘子
三上紀子 森田高年 山崎和子
山崎輝子 山下治子 吉田 誠

編集制作協力 株式会社 アム・プロモーション